

クスコ旅行記

ー世界馬鈴薯会議2018の前にー

有限会社 菊水堂 代表取締役 いわい きくじ
岩井 菊之

2017年12月5日、ペルーで開催のWorld Potato Congress（世界馬鈴薯会議：WPC）から、「Become a Congress Speaker!」とのメールが届いた。応募を試みるも、発表希望者多数で断念し、会議の前にクスコ周辺の視察を行うこととなった。

目的は、じゃがいもの環境を知ること。じゃがいもに出会い、インカの歴史、段々畑（アンデネス）、乾燥じゃがいも（チューニョ）、トウモロコシの酒（チチャ）、コカ茶を体験することである。

5月25日に日本を出発し、翌夕刻、アンデス山中の古都クスコ（標高約3400メートル）に到着した。次の日、マチュピチュ遺跡（2400メートル）に行くため、ウルバンバ（2800メートル）に滞在した。

会場となるクスコは、標高が高いため、事前に、世界馬鈴薯会議事務局から高山病の注意喚起のメールが配信されてきた。休養をよく取り、アルコールを控え、消化のよい食事、炭水化物、野菜、くだものを摂ること。到着後は2時間の休養を取ることなど諸注意があり、病院の連絡先まであった。早速、クスコの空港で高山病に効くというコカの葉を手に入れ、口に含みみたが、効果の程は感じなかった。

クスコ到着の日の夜は、満月の夜。南十字星を眺めることができ、さそり座が大きくなびき輝いていた。

27日、宿を朝7時に出発し、車30分、観光列車2時間、シャトルバス30分、「インカの聖なる谷」ウルバンバ川に沿って狭い谷を移動した。この谷一帯は、ほとんど刈り取られていたが、主にトウモロコシ畑のようだ。事前に、チチャを飲みたいと頼んでいたもので、帰りに寄ることとし、長い棒の先に赤い玉のような飾りのある店で飲める、という話を聞く。数軒が目にとまった。

観光列車は、ゆっくりとウルバンバ川沿いに移動し、サボテンの多肉植物の乾燥地帯から緑豊かな温暖な気候に変化する。インカ道や、インカの遺跡も随所に見られた。山は急峻で、木の育たない環境のようで、山肌は草原のようだ。

短い距離だが環境の大きな変化を感じながら、マチュピチュ遺跡に到着した。クスコの乾燥地帯から来たので、表現が難しいが、奥多摩の高尾山に登ったような緑豊かな環境で、高尾山の展望台に、マチュピチュ遺跡がある、と言ったら笑われるだろうか。

よくガイドブックで目にするマチュピチュ遺跡の（写真にはないが）右側斜面（写



写真1 マチュピチュ遺跡東側斜面

真1 東側)に、大きな段々畑(アンデネス)がある。神殿や居住区と比べると想像以上に大きな規模である。左側斜面(西側)の段々畑は、ガイドの話では畑ではなく、崖が崩れないようにしているもので、右側斜面では植物のタネや動物の糞などが出土するが、左側斜面では出土しないという話であった。かつて、広大な段々畑で、じゃがいもが栽培されていたことを想像してみた。大変不思議な光景だっただろう。

帰路、トウモロコシの酒のチチャを飲むことができた。瓶の底から木のスプーンですくい上げ、コップに注いでもらった。日本人は、飲むと腹痛を起こすことがあるというので、半分でやめておいた。アルコール度数5%程度のやや酸味のある飲みものだった。最近、イチゴを使ったものが人気で、フルーティーな香りがあり、飲みやすかった。

夕食にクイ(食用モルモット)を食べた。干からびた鳥の唐揚げのようで、癖があった。かつてクイはじゃがいもを荒らす害敵だったのだろうか。

28日は、マラス塩田を訪問した。こちらの塩は、インカの段々畑から発見されると



写真2 モライ遺跡

のことだった。土壌改良として使われたのだろうか。

隕石の衝突跡との説明を受けたモライ遺跡(写真2 3500メートル)は、円形の段々畑だ。ここは、農業研究の中心的役割を果たしていたのではないかと考えられている。つまり、各段で異なった気候環境となり、種類の異なる植物を実験的に育てることが可能で、特に円形中央部の窪地は、地温が高くなり、上にあがるにしたがい、地温が下がる構造になっていることが見て取れた。

ピサック遺跡でも大きな段々畑があった。標高差は数百メートルなのか、段々畑が上下に連なり、狭く手間はかかるだろうが、様々なものを栽培していたのだろう。

このあと、世界馬鈴薯会議2018に参加した。

(参考)ポテトチップスの種類と価格(リマ市内)

- ・大袋から小分け 100 g 101円
- ・Lay's 75 g 84円
- ・Bell's PAPAS 150 g 142円
- ・Metro 180 g 149円